

山と海の絆深めて半世紀

東日本大震災から1年。深澤晟雄の会では市民の協力を得て陸前高田市を中心に三陸沿岸地域を支援してきました。昭和35年チリ地震津波の際、「生命尊重こそ政治の基本」という深澤村長は間髪を入れずに村民に呼びかけて支援体制を組みました。以来「山と海との絆」は半世紀にわたって深められ、深澤精神は今日なお光り輝いています。

被災者支援に

生命尊重理念

チリ地震津波は昭和35年5月24日早朝でした。5月30日付広報さわうちには「悲惨だった大津波みんな被災者に救援の手を」と呼びかけています。広報発行日の30日に区

長等を交えた緊急会議を召集して救援活動を決めています。広報の印刷発行を遅らせての支援の呼びかけでした。

その会議で深澤村長は「村一丸となって被災者の苦しみを和らげてあげよう」と、生命尊重の理念を言葉にしています。

6月30日付の広報さわうちは「津波災害で田植ができないでいた高田市

に救援苗を送り届けました。12日夜トラック6台を連ねて10万4643把、13日には5600把あわせて11万243把を救援、感謝されています」と報じ、「義援金は予想以上に進み、4万6090円、慰問品8個を対策本

部に届けました」と報告しています。

40年豪雪には 津波の恩返し

深澤村長が逝去した昭和40年の西和賀は稀に見る豪雪で、田植えができない異常気象災害に見舞われました。

これを知った陸前高田市下矢作農協青年部が「5年前の救援苗に少しでも恩返しを」と立ちあがり、6月7日午前4時、朝もやをつけて4000束の救援苗が届けられました(写真)。当時、県内各地に委

託苗や自衛隊の支援を依頼しましたが、陸前高田市の「愛の救援苗」は農家や関係者を感じさせました。

3・11支援に

広がる絆の輪

3・11大震災に深澤晟雄の会では直ちに支援活動を開始、多くの町民の協力で絆の輪が広がりました。

震災直後の3月21日、元保健師の千田和可さんの求めに保健活動に必要な血圧計などの器具を届けたほか、同27日には大船渡市にバス1台分の救援物資を届けました。7月と10月に陸前高田市の仮設住宅を慰問、今冬は「こたつ」を陸前高田市と宮城県亘理町に届けました。

今後も復興支援の活動を継続しますが、町外からも深澤精神に依拠した本会の活動に共鳴し、支援・絆の輪が広がっていることは力強い限りです。



当時の道路事情からして「午前4時の救援苗」には感謝感激でした

梶雄の心を永遠に ④ 胸像に誓う



本号の胸像建立趣意書は、深澤村長の政治手腕と「村民を裏切ることはできない」という政治姿勢を顕著にして、深澤村長の人生観・哲学観が漂う文面となっています。

派閥抗争解消は 偉大な政治手腕

さらにこれら偉大な業績を遺した氏の人間性、換言すれば村政に取り組んだ姿勢と信念を究めるならば、氏が村長就任直後の言葉として「村政の急務は村内派閥の解消だ」といわれております。

ある時は行政の渋滞を、ある時は村の命運を危機におとしめた政争は、本村における宿命的な禍根の一つだったのではないのでしょうか。氏就任数年にして見事派閥抗争から脱皮せしむることに成功しました。このことは氏の偉大な政治的手腕によることはもちろんでありますが、氏の公平さ誠実さによるものと考えられます。

氏の唱えた沢内村の一体体制も、氏が民主主義の真髄を体得した真の意味の政治家であったことを裏書する一つと思います。

国県議の推挙に 「村民に尽くす」

一体体制の言葉は、しばしば使われましたが、従来の一体体制は一人の人間があらゆる役職を兼務することによって、特定個人の横

暴と利益の独占を招来する非民主性、封建性を内蔵する傾向が多分にありましたが、氏の場合、村内諸団体と、行政当局の独占主義を排斥する協同協力体制の強化を目標としたものでした。六千村民が氏を民主的情廉な政治家としてあこがれたゆえんだと思います。

氏の偉大な政治的才能、政治的手腕に期待した人々がかつての参議院議員選挙、県議選に氏の立候補を要請された時、「現在の沢内はまだ

私を必要としているのではないだろうか。村民の寄せる期待を裏切ることには私の良心が許さない」と固辞したと聞きます。

以上、深澤前村長の政治的業績と、その底を流れる人間性のあらましを憶出のまま綴ったのですが、氏の生涯を貫いたものは氏の人生観であり、哲学観であることはいまでもありません。それは端的にいつて深遠高邁な理想主義者であり、熾烈な実践主義者でもあったのです。

(つづく)



この胸像趣意書を書いた小田島常定氏（写真左）は深澤村長と同級生で、無二の親友ぶりが伝わる両氏の夫婦おそろいの写真。バックに収穫した豆が見える。深澤氏が教育長時代の昭和30年ごろ小田島氏宅玄関前で撮られた写真のようである。